

三陸の海を
放射能から守る岩手の会
ミニコミ通信

第5号

止めよう！ 《再処理》

2005（平成17）年
8月23日発行

編集連絡 S.Oshida
電話・ファックス
019-623-1636

《放射能は海水で薄まる》から安全？

8月15日 日本原燃回答
＝被害を受けるのは 三陸の海＝

三陸の海を放射能から守る岩手の会は、日本原燃（株）へ提出していた質問書への回答を八月一日夕方、同社広報渉外室からのファックスで受領しました。二十日、岩手の会は会議を開き回答について詳細に分析しました。

回答は、「放出された放射性物質は、大量の海水により希釈されるため、周辺の皆様の安全は十分に確保されていると考えます」と、アセスメントも行わないうちに自分たちに都合の良い仮定を用いた評価を行い断定しています。放射能汚染についてあまりに安易で、科学的な批判に耐えられない内容であるという結論に達しました。

本試験を阻止するために、当面する「三陸の海を放射能から守るリレー講演会」の成功を訴えます。



六ヶ所工場 放射能排出口

危険な廃液だからこそ長い長い排出管が必要とされる。人工放射能が浮遊する。

絵：グリーンアクション《ガッテン「再処理」市民ハンドブック》

日本原燃（株）の 回答の要点とその批判

なぜ海洋放出するのか

回答要約（「」は文中から）

「廃液中の放射性物質は出来るだけ取り除きます。一部除去出来ないものは濃度測定により安全を確認した上、海洋へ放出する。」

「海洋放出口は沖合三

キ口、水深四四メートルにあり、放射性物質は、大量の海水により希釈されるため安全は充分確保される」「工場周辺の放射線量は最大見積もつても、年間約0.022ミリシーベルトで」「自然放射線の約百分の一である。」

本当に放射能廃液を捨てる！

私たちの批判

生物や人類にとって危険な人工放射性物質を海洋に垂れ流すことを公言しており、驚きと底知れない不安を感じます。彼らの発表した数値から計算した「経口致死量」は年間四万七千人分に相当する。しかもそれは数十年から数万年も浮遊するものが大部分である。生物による濃縮や、食物連鎖により人間の体内に入り、「内部被曝」の被害をもたらす、危険な行為である。

「海洋放出する放射性物質の年間推定量は次の通り。」

トリチウム	約1.8 × 10の十六乗ベクレル
ヨウ素129	約4.3 × 10の十乗ベクレル
ヨウ素131	約1.7 × 10の十一乗ベクレル

その他の核種

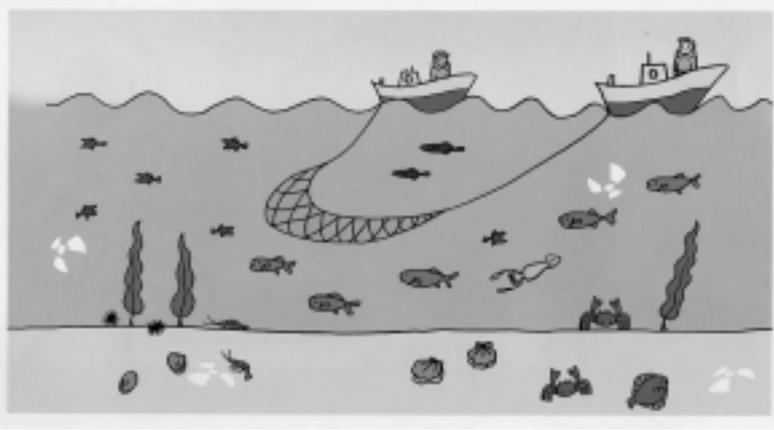
アルファ線を出す核種 約3.8 × 10の九乗ベクレル

アルファ線を出さない核種 約2.1 × 10の十一乗ベクレル

(一面からの続き)
生態系に与える影響

回答要約(「」は文中から)

「放射性物質は、地球誕生から自然界に存在しており、年間約2.4ミリシーベルト(世界平均)の放射線の量を受けています。」「工場周辺は0.022ミリシーベルトで自然放射能に比較し充分小さい。」



**流された人工放射能は海産物に蓄積
三陸は海の宝庫です**

絵：グリーンアクション《ガッテン「再処理」市民ハンドブック

「いものです」「生態系に對しても影響を与えるものではない」

私たちの批判

人工放射能は極めて危険

生物は自然放射能と共に進化適応をしてきました。自然界の放射能は体内臓器濃縮はしないし、濃度も薄いので人体は適応してきてた。

これに対し

て、再処理工場の場合、人工放射性物質であり、生物にどんな悪影響をもたらすか、よく分かっていないことが多い。また未知のことも多い。

放射性ヨウ素は甲状腺に、セシウムは筋肉に、ストロンチウムは骨など特定臓器に濃縮する。また、トリチウムは濃縮しないが、自然と比べ考えられない濃度であり、海洋生物の染色体に異常をもたらし危険が大き

い。生物や人体への内部被曝についても、これまで認識が不十分であったが、アメリカ科学アカデミーが「低線量被曝でも発ガン」という報告書を発表するなど、国際的にも危険性を重視する学説がますます強まっている。原発の数百倍と言われる、放射性物質が三陸の海に流されると、豊かな海藻や魚の食物連鎖の中で濃縮され放射能の濃度が高まる。その魚を多く食べる日本人の体内には極めて多くの放射性微粒子が

蓄積され、細胞の新陳代謝や生殖に大きな悪影響が出かねない。

再処理工場が既に操業しているイギリスセラフィールドの海産物の汚染をイギリス政府も認めている。しかし、子どもにも多発している白血病などの因果関係を認めていない。日本人はイギリス人の十倍もの魚を消費し、さらに海藻も食べる。明日の三陸の姿が暗

く示させられる。(次号に続く)



一口解説

《再処理工場の放射性物質》 その2

ヨウ素 129

コンブ・ワカメに吸収・付着

昆布ワカメなどの海藻はヨウ素を多く吸収します。再処理工場から海洋に多量に放流される放射性のヨウ素 129 も吸収してしまいます。ヨウ素 129 の半減期は 1600 万年であり環境に出てしまうと永久に放射線を出し続けます。植物は潮風に乗ってきたヨウ素を高濃度に濃縮する能力があります。

甲状腺が危ない

ヨウ素は海藻や植物を食べる人間の甲状腺に高濃度に濃縮していきます。ふつうのヨウ素にまぎれこみ濃縮した放射性ヨウ素は甲状腺を集中的に被ばくさせ、ガン化などの障害を与えます。原発事故に備え、子供達の甲状腺を放射性のヨウ素から守るため原発周辺市町村にはヨウ素剤がすでに用意されております。他に放射性のヨウ素 131 (半減期 8 日) も多量に放流されます。(N)

久慈地区講演会中止

久慈地区講演会は、有志が準備会を重ねて開催を企画しましたが、関係筋の理解と協力が順調に進まず、時間切れもあり、今回は中止と決定しました。

宮古市議会で質問

八月十一日、宮古市議会で横田有平議員(重茂漁協元参事)は六ヶ所再処理工場について、市当局に質問を行いました。市長は、「大きな関心を持って、諸方から資料を集め適切な判断を行っていく」と回答しました。

**宮古・気仙講演会
協賛・後援の輪拡大**

宮古、気仙地区では、講演会を前に、実行委員会を開催するなど、準備が進められています。

宮古地区のポスターは、本年新年の、三陸の海の初日の出をあらわし、「みんなを守るう、豊かな三陸の海」と呼びかけています。両地区講演会への共感の輪は大きく広がっており、現在、協賛団体は十九団体、後援団体は二十六団体に達しています。